

ゲーテとファウスト(講演要旨)

和田孝三

A. ゲーテについて

1. ゲーテとその家族

Johann Wolfgang (von) Goethe vonは貴族の称号で1782年に授与された。

1749年～1832年 82歳で「ファウスト第二部」が完成した半年後に死亡。

妻 Christiane Vulpius 造花工場の女工、1788年より同棲、内縁の妻であったが、1806年正式に結婚。1816年死去。

2. ゲーテの多彩な活動

(1) 法律家 ゲーテの本業は法律家・弁護士であった。

シュトラスブルク大学で法律を勉強していた時のフリーデリケとの恋愛が「野バラ」の詩を生み「ファウスト」のグレートヘンは彼女がモデルという。

又、ヴェツラーでの研修の時のロッテに対する片思いが、「若きヴェルテルの悩み」の創作につながった。

(2) 文豪 ダンテ、シェクスピアと並ぶ西欧の三大文豪とされる。

ドイツの生んだ最大の詩人。

(3) 政治家 ワイマル公カール・アウグストの招聘を受けて1775年ワイマルへ。

1776年枢密顧問官となる。軍事・財政・消防・道路建設・鉱山開発

等に携わる。10年後嫌気がさしてイタリアに逃亡。2年後帰国。以後は、実際政治からは離れて文部大臣のような仕事に従事。

(4) 自然科学者

a. 生物学 顎間骨の発見。

原植物論—原型論。

b. 色彩論 ニュートンの光学論と対立。

ニュートンは単色光を基本として、数学的に分析・理論構成。

ゲーテは明るい陽光を基本として、明暗により色彩が生じるとした。

ニュートンを論難、罵倒した。

3. 政治に対する態度

民主主義は凡庸の支配であるとした。

ナポレオン鼻唄であった。ナポレオンはフランス国民には英雄であるが、ドイツ国民にとっては压制者・搾取者だった。ナポレオンに対する戦いは、ドイツ人にとって解放戦争であったが、ゲーテはこれを拱手傍観し、売国奴と非難された。

4. キリスト教に対する態度・信条

「私は反キリスト教徒でもなければ、異教徒でもありません。とはいえ、私は確固たる非キリスト

教徒です」

「私は詩人乃至芸術家としては多神論者です。自然科学者としては汎神論者です。倫理的存在としては一神教徒です」

ゲーテの考えるキリスト教は「愛の宗教」であった。

5. ゲーテの女性関係

<u>ゲーテの相手となった女性</u>	<u>相手の年齢</u>	<u>ゲーテの年齢</u>
グレートヒェン(フランクフルト時代)	16?	16
ケートヒェン(ライプツイヒの学生時代)	20	17
フリーデリケ	18	21
ロッテ	19	23
リリー(婚約したが半年後に解消)	17	25
シュタイン夫人(ワイマル時代)	33~44	26~37
クリスチアーネ	22~50	39~66
ヴィルヘルミーネ(人妻)	18	58
マリアンネ(人妻)	20	65
ウルリーケ	18	73

ゲーテは美しい女性を見るとすぐ燃え上がるが、一方で常に冷静な気持ちが目覚めていて、自分の自由を失うことを恐れていた。

これらの女性との関係が、多くの場合、彼の文学作品を生み出す契機となった。

B. 「ファウスト」について

1. 前史

ファウストは 16 世紀初めにドイツに実在した。あらゆる学問知識を修め、魔術・呪術にも長けていると自称してドイツ各地を遍歴。錬金術にも凝っていた。

死後、伝説化。

シュピース本「ファウスト博士の実伝」--勸善懲悪的物語

⇒マーロウの「ファウスト物語」--死を賭しても真理を追究する近代的精神

⇒レッシング 彼の構想する「ファウスト」の梗概を発表--ファウストの救済という概念を打ち出した。

2. ゲーテの「ファウスト」の成立

20 代から死ぬ半年前まで 60 年かけて執筆。継続的に書き続けたわけではなく、ある時期に集中的に執筆。

第一部 1797~1806 年 シラーの慫慂

第二部 1826~1831 年 エッカーマンのサポート

3. 「ファウスト」の梗概

ごく一部を除いて全編 12,111 行の詩で綴られている。

一貫したストーリーの下に緊密に構成された長編小説乃至物語ではなく、個々の物語の集まりというような外観を呈している。それによって人間世界の様々なあり方を古今東西にわたって万華鏡のように映し出し、世界文学の最大傑作の一つに数えられている。

第一部 全体のプロローグの部分と、ドイツの中世の学者の世界、市民生活を描いた部分に引き続き、後半は所謂「グレートヒェン悲劇」となっている。

第二部 第一部の継続ではなく、全く新しい物語となっており、五幕構成である。

第一幕 皇帝の宮廷

第二幕 古代ギリシア世界

第三幕 古代ギリシア第一の美人ヘレナとの愛の世界

第四幕 皇帝軍と反皇帝軍の戦い

第五幕 新しい土地の干拓事業、ファウストの死と救済

4. 「ファウスト」の思想

ファウスト的巨人主義

「ファウスト」は人間としての可能な限りの最高の認識・体験をしようと努力し、行動する近代西欧の人間の典型を描いたとされる。

「この世界の奥の奥で統べているものは何か？ それを知りたい」

この書齋での独白は、ファウストのあくなき認識欲・体験欲を示す。然し、書齋に籠って学問に励んでいるだけでは限界があることを悟り、広い世界に打って出て、あらゆることを経験しようとするのであるが、その為に悪魔メフィスフェレスの力を借りようとする。そしてメフィストに賭けを提起し、若し現状に満足し、停滞を欲して、瞬間に向かって

「暫し、留まってくれ、お前はとても美しいから」

と言ったら、賭けに負けたとして、魂をメフィストに譲り渡すという。

「ファウスト的巨人主義」はゲーテが生み出したものでなく、近代西欧の人間の典型を描き出したものであるが、トインビー、シュンペーター、ゾンバルト等はこのような人間が近代西欧の資本主義、近代的科学を生み出したとした。こうしてあらゆることを経験し、とことん探求しようすることを「ファウスト的巨人主義」と称するようになった。

この「ファウスト的巨人主義」の萌芽は、ゲーテの「ファウスト」の500年前に書かれた、ダンテの「神曲」のなかでの、オデユッセイウスの独白に見られる。

メフィストとの賭け

上記のように、ファウストはメフィストとの間に、彼が瞬間に向かって

「暫し、留まってくれ、お前はとても美しいから」

と言ったら、賭けに負けとする約束をするのであるが、第二部第五幕で

「自由な土地で、自由な民と、共に生きることが出来たら、その時、俺は瞬間に向かって『暫し留まってくれ、おまえはとても美しいから』ということが出来るだろう」

と言う。この言葉を聞いて、メフィストは賭けに勝ったと思い、ファウストの魂を地獄に持ち去ろうとするが、天使の群れに奪われてしまう。

活動と救済

「ファウスト」冒頭の「天上の序曲」での

「人間は努力している限り迷うものだ」

と言う言葉と、第二部の最後の「山峡」の章での天使の群れの歌う

「向上を目指して努力する人間を誰でも私達は救済することが出来る」

という二つの言葉が、「ファウスト」全体の枠となっている。

ゲーテは「活動」を重んじ、「停滞」を嫌った。

ゲーテにとって、「救済」は天国に行って永遠の休息を得ることではなく、この世よりも一段高い圏域に上がって、一層高い活動の場を得ることであった。

男性的原理と女性的原理

人間は努力しなければならず、努力する人間は救われるというのがゲーテの思想であるが、ただ活動するだけで足りず、そこに女性の手助けが必要であるというのがゲーテの考えであった。努力して励む男性に、女性の愛が加わることによって救済が得られると考えた。ファウストは最後にグレートヒエンの懇願を受けた聖母マリアによって救済される。

「永遠にして女性的なものが、我々を(彼岸に)引き上げてくれる」

ファウストとメフィストフェーレス

ゲーテの描く悪魔メフィストフェーレスは非常に人間臭い。その意味で、ゲーテはファウストに並ぶもう一つの人間の典型を描き出したといえる。

ファウスト 理想主義的、情熱的

メフィスト 現実主義的、冷笑的

このような対照的な人間を描く手法は、セルバンテスの「ドン・キホーテ」におけるドン・キホーテとサンチョ・パンザの対比にも見られる。

(参考)世界的古典と称される文学は、いずれもある種の人間の典型を描いている。

ドン・キホーテ 認識を疎かにして行動に突っ走る

ハムレット 認識に拘って行動に移れない

ファウスト 認識欲も行動欲もともに旺盛

このようにゲーテは近代的人間の一典型を描いて世界的古典を創作したのである。

以上